

4

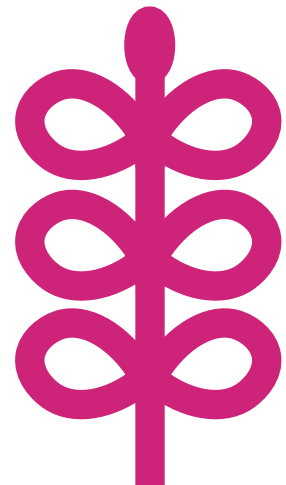
誰一人取り残さない 社会の実現に向けて

～ SDGs の社会的側面の取り組みについて～

千葉大学は、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けて、ダイバーシティ、障害のある方の雇用、情報セキュリティの確保のほか、様々な教育・研究活動と学生主体の活動により社会的分野の取り組みを進めています。

p.46 誰もが働きやすい環境の実現を目指して

p.47 SDGs 達成に向けた社会的な取り組み



誰もが働きやすい環境の実現を目指して

千葉大学では、誰もが働きやすい環境の実現を目指し、ワーク・ライフ・バランス支援体制を充実させ、女性教職員や、女性管理職の比率を向上させたり、障害者と共に働く社会づくりのために、障害者の方々を積極的に雇用したりといった取り組みを実施しています。



ダイバーシティ※推進の取り組み

千葉大学運営基盤機構では、2005 年度に、女性研究者の仕事と仕事以外の生活との両立支援をスタートしました。2006 年には「両立支援企画室」を開設し、女性専用休憩室の設置や専任アドバイザーによる総合相談、図書の貸出、病児ケア勉強会開催等、教職員や学生の仕事や研究と家庭生活の両立支援を行っています。同室は 2015 年に「男女共同参画推進部門」、2020 年 4 月から「ダイバーシティ推進部門」となり、これまで実施してきた両立支援に関する取り組みに加え、ワーク・ライフ・バランスの支援や意識改革を推進しています。

これまでに、子育て中の教職員を対象としたベビーシッター利用料金の一部補助、妊娠・育児・介護等により研究の継続が困難な教員に対する研究支援要員の配置、女性教員の少ない理工農学系分野への女性教員採用促進等を行いました。その結果、仕事や研究と育児や介護を両立に役立つ環境が整備され、2007 年度に 16% だった女性教員比率は 2021 年 4 月には 21.8% へ、事務系職員の女性比率も 27% から 47.7% へと増加しました。なお、全労働者に占める女性の割合は 56.4%、管理職に占める割合は 19.3% です。

2020 年度からは、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）」に選定され、若手研究者や女性研究者のグローバルな研究活動を促進する支援制度の新設・拡充、優秀な女性研究者の上位職へのキャリアパスを保証する仕組みづくりを進めています。

※ダイバーシティ：多様性という意味で、国籍、性別、年齢などにこだわらず、さまざまな人材を登用し、多様な働き方を受容していただくという考え方のこと。



2020 年にリニューアルした女性専用休憩室 ▲

障害者雇用の取り組み

すべての事業主は、「社会連帯の理念」に基づき「共同の責務」として、事業主区分ごとに定められた法定雇用率以上の割合で障害者を雇用することが「障害者の雇用の促進等に関する法律」に定められています。本学の場合、法定雇用率は 2021 年 3 月 1 日から 2.6%、人数にして 85 名相当の雇用が必要となっており、この責務を果たすとともに、常にクリーンなキャンパスを維持することで大学のイメージアップとなるように、障害者の方々にキャンパスの清掃業務を担っていただく教育環境整備グループを設置し、学内の主要道路の落ち葉やゴミの清掃などを行っています。スタッフは様々な障害を抱えていますが、キャンパスの清掃業務にやりがいを感じており、障害による差異はあっても、清掃業者に依頼した場合と同じ水準の結果を残すことを就業ポリシーとして掲げています。また、障害のある方が同じキャンパスで当たり前前に働いていることは、学生や教職員の意識改革にもつながり、共に働く社会づくりの一助になると考えています。

この活動は、2008 年度の西千葉地区での開始を皮切りに亥鼻地区・松戸地区へと順次拡大し、2020 年 12 月 1 日現在、3 地区で合計 26 名（重度障害換算後 36 名分）の障害者の方々が勤務しています。

本学の障害者雇用数は、2020 年 12 月 1 日現在、法定雇用率を達成している状況にありますが、引き続き、公共職業安定所や障害者就業支援センターなどと連携し、障害者と共に働く環境づくりをさらに推進していきたいと考えています。



清掃業務の様子 ▶

SDGs 達成に向けた 社会的な取り組み



千葉大学では SDGs 達成に貢献する教育・研究活動や学生活動を通じた社会的な取り組みを推進しています。



生活が困窮する学生を支援

千葉大学は、保護者の経済状況悪化や緊急事態宣言でアルバイト収入の減少により経済的に困窮となった学生を早急に支援するため、「新型コロナウイルス感染症拡大に伴う緊急支援事業」として、千葉大学基金から 504 名の学生に生活費等の支援を行いました。

また、千葉県協同組合提携推進協議会の呼びかけに参集した県内 9 つの団体*からのご支援のもと、2021 年 3 月 30 日と 31 日に、学生への「食の支援」が行われました。食品の配布には事前予約制として密にならないように感染防止対策を行い、参加した学生数はおよそ 1,000 名にのぼり、米や缶詰、カップ麺、飲料水、パスタなど、用意された食料等を受け取り、大学からは奨学金等各種支援事業の情報チラシを配布しました。同イベントは 2021 年度も 7 月 13 日、14 日に開催されました。

食料品の配布の様子 ▼



※支援団体名 (敬称略)

J Aグループ千葉、千葉県漁業協同組合連合会、千葉県森林組合連合会、生活協同組合パルシステム千葉、生活協同組合コープみらい、生活クラブ生活協同組合、なのはな生活協同組合、千葉県生活協同組合連合会、フードバンクちば

地域を志向する知の拠点の役割

千葉大学コミュニティ・イノベーションオフィスは、文部科学省の補助事業である「地(知)の拠点整備事業(COC: センター・オブ・コミュニティ)」(2013～2017年度)と、「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」(2015～2019年度)を通じて、大学と地域の協働による地域活性化・地方創生を推進してきました。

COC は、千葉大学の立地する千葉市、松戸市、柏市などの千葉都市圏を実践フィールドとして、郊外コミュニティの課題に対し、学生が地域再生に関する幅広い教養と知識・実践力を身につけることを目標としました。一方、COC+ は、若い人たちの人口流出が進む外房や南房総など千葉地方圏を実践フィールドとして、千葉県内の大学・自治体・企業等が協力し、地方で活躍できる人の育成・地方での仕事づくり・若者が地方に根付くことを目的としました。

2020 年度には、全学共通教育プログラム「コミュニティ再生ケア学」と「地域産業イノベーション学」を統合し、全学副専攻プログラム「ローカル・イノベーション学」を開始しました。学生が主専攻の専門性を持ちながら、地域産業・イノベーションや地域・コミュニティに関する幅広い教養と、地域再生の知識、実践力を身につけることができます。また、新たに地方創生における国際的な協体制度として、台湾の 6

大学と連携し、地域課題を日本と台湾の学生で考える PBL (Project Based Learning) コースを開講しました。文化や慣習など、台湾にちなんだ「何か」を千葉と関連づけ、地方創生プランを考案するオンライン授業や、その成果を発表する「千葉に台湾をインストールしよう! 『千葉台湾地方創生プランコンテスト』」を日台共同で開催し、3 組の学生チームが受賞しました。

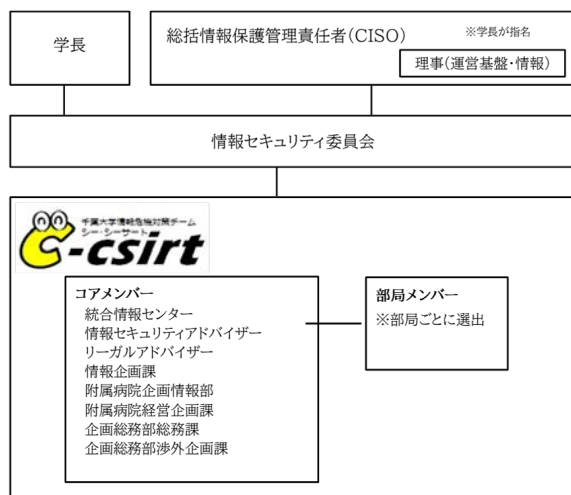
今後も包括連携を締結した県内自治体や企業等と地域活性化・地方創生に関する教育・研究・社会貢献事業を継続するとともに、台湾をはじめとした海外交流協定校との国際連携を進めていきます。

受賞チーム代表者 ▼



情報危機対策における取り組み

C-csirt (Chiba University - Cyber Security Incident Response Team : シー・シーサート) はサイバー攻撃から千葉大学内の情報資産を保護するため、情報漏洩や Web 改ざんにつながる不正アクセス等のセキュリティ上の問題 (インシデント) に対して、早期発見・早期対応による被害の最小化を目的として、予防活動、発生時の対応、改善策の検討及び提案を行う約 70 名体制のチームです。インシデント対応やウイルス対策のほかにも、不審なメールや使用しているソフトウェアの脆弱な情報について学内に注意喚起したり、学内の情報セキュリティの相談に応じたり、研修講師として教職員に啓発活動を行ったりしています。また、千葉県警をはじめとする産官学機関とサイバーセキュリティパートナーシップを締結し、サイバーセキュリティ対策を推進しています。



C-csirt の体制 ▲

セキュリティバグハンティングコンテスト

千葉大学では、昨今のサイバー攻撃に対し、人材不足とされる情報セキュリティの分野において、セキュリティの技術だけでなく、法律・倫理の知識を併せ持つ優れたセキュリティ人材 (学生) の輩出を目的として、2016 年から毎年、「セキュリティバグハンティングコンテスト」を開催しています。これは、指定のウェブサイト上にセキュリティに関わるバグや脆弱性等が存在しないかどうかを、一定の研修を受けた学生がサイトの安全性向上のために調査を実施し、腕を競うコンテストです。

2020 年は 8 月に実施した「情報セキュリティ分析 (実践)」法律・倫理・技術講習を受講して「ハンターライセンス」を取得した 45 名 (26 チーム) が、実際に脆弱性検査を行い、16 チーム (30 名) がレポートを提出しました。審査の結果、5 チームが受賞しました。



表彰された学生の皆さん ▲

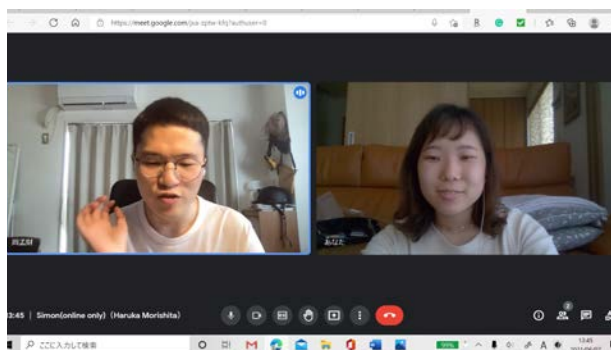
English House の取り組み

千葉大学 English House は、学生が外国人講師との個別レッスンや試験対策講座を受ける、留学生との交流を楽しむ、海外ドラマや映画を観る、英字の新聞や漫画を読むなど、英語の環境に浸ることができる場所です。

2020 年度は、これまで対面のみで実施していた活動をオンラインで実施できるようにシステムを構築し、留学生及び日本人の学生アシスタントと英会話ができる Conversation Sessions、留学生と言語交換ができる Language Exchange Programme (LEX)、留学生による母国の文化紹介イベントを行いました。コロナ禍で留学に行けなくても留学生と会話ができる、自宅で気軽に英会話を練習できる、一方通行のオンデマンド授業とは異なる、双方向のコミュニ

ケーションならではの面白さがある、英語の上達だけでなく考え方も変えてくれた、などと多くの活動参加者から好評をいただいています。

Conversation Sessions の様子 ▼



SDGs 日本政策学生研究会

持続可能な開発目標（SDGs）の実現に当たっては、社会の持続可能性に関わる課題について、学生が主体的に調査研究を行い、その結果を行政、企業において持続可能性に関わる仕事をしている社会人に発表する機会を設けることが重要です。このことによって、学生の課題解決型研究活動の促進と、社会の持続可能性に関わる課題解決の推進を図ることができます。

2020年12月26日に、千葉大学公共学会が持続可能な開発目標の実現に向けた学生による政策提言研究会「第2回SDGs日本政策学生研究会」をオンラインで開催しました。全国5大学から9の発表が行われ、3つの分科会ごとに分

科会賞が選出されました。また、「SDGsに若者がとりくむことへの期待」というテーマで、山本良一氏（東京大学名誉教授）の基調講演が行われました。



分科会のコメントーターのみなさん ▲

千葉大学 手話サークルウルトラマンの会

手話サークル ウルトラマンの会は、耳が聞こえない人との会話手段の一つである手話を勉強し簡単な日常会話ができるように実践練習をしています。大学に入ってから手話を始めた学生が多いので、普段の活動では自分たちで作ったテキストを用いて勉強会を開催したり、ゲームを通して手話に親しんだりしています。例年は、入学式や卒業式などの式典では、壇上で手話通訳を行ったり、大学祭などの行事やイベントでは、手話コーラスや手話劇を通して実際に聴覚障害のある方と交流し、障害に対する理解を深めています。さらに、地域の手話サークルと活動したり、聴覚障害以外の身体障害をもつ方々とも関わるなど幅広い活動をしています。



2021年4月の入学式での手話通訳の様子(右) ▲

学生による学生支援とボランティア活動団体「ふれあいの環」

ふれあいの環は活動趣旨の違う6つの団体で構成され、学生による学生支援活動（ピアサポート）やボランティア活動を行っています。2020年度はコロナ禍により対面での活動があまりできませんでしたが、例年はさまざまな活動を実施しています。

ノートテイク会（聴覚障害者支援）

講義に同席して教員の話や周りの音を文字にして見せる情報保障によって、聴覚障害を持つ千葉大生を支援しています。講義以外にも入学式や卒業式などでの字幕通訳も行っています。

チャレンジド・サポート みのり

（身体障害者支援）

身体に障害を持つ学生のために、車椅子使用者の移動や授業参加の支援、学生生活の相談、障害の理解促進活動、学内バリアフリーマップの作成などを行っています。

C-vol（ボランティア支援）

千葉大生のボランティア活動を支援するために、ボランティア情報の発信や、イベントの企画・運営、災害ボランティア活動などを行っています。

CISG（留学生支援）

留学生の学生生活支援や日本人学生との交流を促進するため、新入留学生の入室手伝いや母国の文化を紹介する Universal Festival の開催、大学祭での留学生屋台の手伝いなどを行っています。

career port（キャリア支援）

イベントを通して自己の人生や価値観を考える機会を提供しています。なんとなく過ごしていると周りに流され、あっという間に過ぎてしまう大学生活です。そんな中で「今取り組んでいること」、「頑張っていること」、「自分について」、「将来について」そういったことを少し立ち止まって考える場所を作りたいと考えて活動しています。

GCAP（学生コミュニティ支援）

学部や学科を越えた繋がりを発展させ、千葉大生の充実した学生生活を支援するために、新入生サポート会やカタリベカフェの企画・運営を行っています。



2019年度の車いす講習会の様子 ▲



2019年度のカタリベカフェの様子 ▲

千葉大学ユニバーサルフェスティバルの開催

千葉大学国際教育センターでは、留学生が日本人学生たちと協力しながら、自国文化紹介を行う「ユニバーサルフェスティバル」を、1995年から年2回（6月・12月）の頻度で開催してきました。2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で6月の開催は中止となりましたが、12月はZoomを使ったオンラインで実施することができました。当日は、アメリカ、メキシコ、イタリアの元留学生が作成した母国の大学などについての動画を、学生スタッフが紹介しました。このイベントの企画運営はふれあいの環のCISG（千葉大学国際学生会）が担っています。



ポスター ▶

SDGs ボードゲームを中学校の授業に提供

千葉大学のサークルである仏教哲学研究会は、仏法の生命尊厳の思想に基づき、「平和・文化・教育」活動を行っています。2020年には、学生たちが考案したオリジナルのSDGsボードゲームは、千葉市立小中台中学校の社会科でモデル授業の教材として使用していただき、授業にゲストとしてオンライン参加しました。この活動を通して、SDGs教育推進・新たな授業スタイルの改革に貢献できました。受講した中学生の感想では、「日常行動を見直すきっかけとなった」、「友達と協力してゲームに取り組み、楽しみながらSDGsについて学べた」との声もいただきました。これからも一人一人がSDGsに関心を持ち行動できるきっかけとなるような活動していきたいです。

SDGs ボードゲーム ▶



コロナ禍で孤独になりがちな1年生との交流企画を開催

2020年度は前期がキャンパス入構規制で、オンライン授業ばかりとなり、学生たちにとってはパソコンばかりに向かう毎日となり、特に一人暮らしの学生にとっては、孤独との闘いになっていました。新入生は入学式も中止となり、キャンパスを歩くことも、友達を作ることも難しい状況が続いていました。例年は、サークルや部が、新歓のお食事会や交流会を開催して、新入生をもてなすのですが、感染防止の観点で、これらもすべて中止となり、オンラインでの新歓活動や交流会となりました。

環境ISO学生委員会も春はオンラインで新歓活動を行いました。後期になっても孤独を感じている一年生がいることから、「誰一人取り残さない」という気持ちで新入生が千葉大生としての実感を持てるよう、環境活動の一環として、交流企画を実施しました。どちらも参加した1年生の中には、初めてキャンパスをゆっくり歩いた人もいて、友達作りにも良い機会となったようでした。

【西千葉キャンパスウォークラリー】

毎年、ゴミ拾いをしながら構内を歩き、大きなごみや自転車の放置等、キャンパスの景観を害している場所を記録して管理担当部署に報告するという「構内めぐり」を実施しています。2020年度はこの企画にウォークラリーの要素を加えて、11月21日に1年生との交流を行いました。チームでゴミ拾いをしながら歩き、ポイントに置かれたクイズに回答するというイベントで、14名の1年生が参加しました。

【松戸はっぱラリー】

松戸キャンパスでは、12月13日に、園芸学部という特性を活かして、キャンパス内をめぐり、マップや樹種の紹介文をもとに、指定された木の葉っぱを集めるという「はっぱラリー」を行いました。キャンパス内の自然を散策し、樹木に興味を持ってもらうことを目的とし、9名の1年生が参加しました。



◀ 松戸葉っぱラリー



使用したキャンパスマップとクイズの回答用紙 ▶